

都良香像の変質と「天神縁起」

— 鬼の付句をめぐって —

黒 木 香

はじめに

菅原道真という人物がいる。宇多天皇の治政下で絢爛たる詩を謳いあげた人だが、今、人は彼を「天神」と呼ぶ。「天神」と呼ばれるけれども、彼は元々一人の「人間」であった。そして神に祀られた瞬間から、人間としての道真の人生は「神」として説明されねばならなくなつたのである。この場合、道真の周辺にあって、彼と関わりを持った人物は、天神との関わりの中ではどのような位置を与えられることになるであらうか。

本稿では、都良香に関する一説話が、天神の影響によって何如に変化してゆくかを辿り、天神説話の中で良香の人物像が矮小化してゆくあとを辿ってみたい。

一、都良香

実際の説話を見てゆく前に、良香について述べておこう。良香は承和元年（八三四）に生まれ、元慶三年（八七九）二月二十五日に四十六才で薨じている。父親の貞継は主計頭で正五位下であった。良香は貞観十一年（八六九）に三十六才で対策、及第したが、この時の「神仙策」は名文の誉れ高い。翌十二年に少内記に任じられ、十五年に大内記に転じてから没する直前まで内記の職を務めた良香

は、その間に文章博士・越前権介も兼任している。十年近くにわたる内記の職に在ったことは、その才が当時高く評価されていたことを窺わせる。

良香の人となりを推測させるものとして、『本朝神仙伝』に収められる一連の説話があるが、確実な伝記ではなく虚構性が強い。そこで『三代実録』の元慶三年二月二十五日の条に記される彼の薨卒伝を見ると、

姿體輕揚。甚有_二膂力_一。博通_二史傳_一。才藻_二覽發_一。

聲動_二京師_一。居_レ貧_レ无_レ財。常不_レ舉_レ纒_レ云々。

とある。良香は博識で、詩の才が豊かであるだけでなく、体軀堂々たる威丈夫であったことがわかる。彼の文人らしからぬ武人的性向については、既に川口久雄氏によって指摘されている^{〔全〕}。

良香の詩人としての才がどの程度の評価を得ていたかを知る手掛りとして、『和漢朗詠集』の入集詩数を見ると、日本の詩人の内では、菅原文時四四首、道真三八首、大江朝綱・源順三〇首、紀長谷雄二二首、慶滋保胤一八首に次いで、六番目に多い一三首が収められている。無論入集している詩の数が多いことが即ち詩人としての技術を示すものとは言いがたいが、平安時代中期頃には、良香の詩は相当に高い評価を受けていたものと認められ、彼は貞観期を代表

する詩人であると見做し得る。

二、鬼の付句

『朗詠集』に収められる良香の詩の中に、「氣霽風梳^ニ新柳髮^ニ氷消波洗^レ旧舌鬚^ニ」(上巻・早春)という、元慶二年(八七八)一月二十日に催された内宴の席で作られた詩がある。この句の意は「天氣うららかに晴れ、暖い風が新芽を出した柳の枝をそよがすのは美人の髪をくし梳るようだ。はりつめた池の氷も消えて水辺の舌がさざ波にゆれ動くのは、去年からの古い鬚を波が洗うように見える」となる。

この詩をめぐって、『江談抄』と『本朝神仙伝』によく似た説話が収載されている。

江談抄

故老傳云。彼此騎馬人。月夜過^ニ羅城門^ニ。誦^レ此句^ニ。樓上有^レ聲曰。阿波禮阿波禮。文之神妙自感^ニ鬼神^一也。

(群書類従本による)

神仙伝

(良香)昔作詩曰。氣霽風梳^ニ新柳髮^ニ。人誦此句過^レ朱雀門^ニ前。樓上有^レ鬼大感歎^レ之。

(日本思想大系本による)

ある人物(『江談抄』では「騎馬人」、『神仙伝』では「人」)が良香の詩句を誦じるのを鬼が聞き、その詩に感じたという内容である。鬼の居る場所が『江談抄』では「羅城門」、『神仙伝』では「朱雀門」と相異なるが、両門ともに怪異の多い門であったから、大きな異同ではない。この説話の眼目は傍線部の、鬼が良香の詩句に感じたところにある。これは『古今集』の序に言う、秀逸な詩歌は「めに見えぬ鬼神をもあはれとおもはせ」ることの一例とも

言えよう。

つまり『江談抄』と『神仙伝』とは相似の関係にあって、共に良香の詩句が秀句であることを語る説話なのである。両書は共に大江匡房の撰したものであるとされる。彼の没年は天永二年(一一一一)であるから、遅くとも一一〇〇年頃までに伝えられていた説話であろう。

次に『和漢朗詠集私注』に目を転じることにする。引用は内閣文庫蔵室町期古写本による。それには、

説文曰雨^ヲ止^ラ日霽^ト風吹^ハ弱^ニ柳^ヲ似^ク梳^レ髮^ト旧年之苦當^テ

春^ニ猶^テ殘^リ其生^ヲ岸^ニ之^ノ貞^ニ似^ク物^ノ鬚^ニ也下句^ニ羅城門^ニ鬼付^クク^レ之^ヲ

と記されている。この内閣文庫本は、多くの諸本を有する『私注』の中でも古態を留めるものと言われ、その跋文に応保二年(一一六一)に成立した原本を書写したことが記されている。右の引用部分の傍線部、「下句ハ羅城門ニテ鬼之ヲ付ク」という箇所は『江談抄』・『神仙伝』の伝えるところとは異なり、鬼が直接に詩作に関与していることを伝えており、応保二年当時には良香の詩句の下句は鬼が作ったという説話が伝えられていたことになる。

『江談抄』・『神仙伝』と『私注』との成立の間にはおよそ五十年程の隔たりがある。そこで二種の説話は同時期に並行して存在していたか、或いは前者から後者が派生したか、という二つの場合が想定できる。ところがここで参照しなければならないのは、『江談抄』の伝える次の説話である。

三千世界眼前盡。十二因緣心真空。^{勸夏護竹生端}

故老傳云。下七字作者難^ニ思得^一。嶋主弁才天告^ニ教^一之。

これは種々の説話集や物語に引用される有名な説話であるが、こ

こでも良香の詩句の下句は弁財天の作であると伝えられている。つまり匡房の伝えた弁財天の付句の説話と鬼の感嘆した説話とが、いっしょに合体して、『私注』にあるような内容となったと考えるのが自然であろう。^(註5)

『私注』と同じ形の説話は『撰集抄』巻八にもある。

延喜の初つかた、都良香、きさらぎの十日比、内へまいれりけるに、朱雀門の辺にて、春風に青柳のなびきけるをみて、

気霽風櫛新柳髪

と詠じて、下句をいはんとて、うちあんぜるに、朱雀門の上より、赤鬼の白たうさぎしてものおそろしげなるが、大なる声し

て、

氷消波洗旧苔鬚

と付て、かきけすごとくにうせにけりとなん。^(松平文庫本による)

鬼の描写等が詳細になってはいるが、鬼が良香の詩作に関与したという点において変化はない。引用しなかった部分に「此詩、意たぐひなくぞ侍る」、「鬼の付る下句、又ありがたくぞ侍べき」との評言があることから、鬼の作した詩句へと興味を移しつつも、依然として良香の詩に対する称讃も忘れられていないと言えよう。傍線部については後述する。

三、道真登場

ところが次に引用する『十訓抄』を見ると、これまでに見てきた同種の説話にはなかった点が指摘できる。

同人、羅城門の前をすくるとて、「気晴風梳新柳髪。」と詠

じたりければ、樓のうへに聲ありて、「氷消浪洗舊苔鬚。」

とつけたりけり。良香、菅丞相の御前にて、此詩を自嘆し申ければ、「下句の鬼のことはなり」とぞ仰られける。^(第十・六)

^(岩波文庫本による)

一読してわかる通り、菅原道真が新たに登場しており、しかも彼は良香の虚偽を見破るという役どころである。良香の詩が作られた元慶二年の内宴の席には道真も連なっていて、詩と詩序とを作しているが、これはこの説話に道真が登場する直接的な契機ではないようである。その上、ここでは道真の良香に対する優位性が示されているが、元慶二年時における二人の官位は従五位下と相並んでいた。

	貞観11	良	香	道	真
	12	正六位上			
	15	従五位下			
	16				
元慶3		従五位下			
		従五位上			

二人の官位を対照させてみると、上図のようになる。道真が良香の指導的立場に立ち得るほどの身分的な差違は、ここには見出し得ない。

『十訓抄』はその序文に「建長よとせの冬神無月半の比」「しるしをば」ったとあるのを信ずれば、一二五二年の成立である。一方西行仮托の書として知られている『撰集抄』は先学の研究により、一二五〇年前後の成立であると言われている。つまり両書が成立したとみられる十三世紀半ばには、同じ題材の説話であり乍ら、道真が登場するものとそうでないものとが併存していたことになる。

ここで前掲の『撰集抄』の傍線部に話をもとそう。事実と照合す

るに、㊶も㊷も誤りである。㊸については又別の機会に考えたい。そこで今は㊶に注目する。都良香が元慶三年（八七九）に没したことにについては初めに述べた。その彼が、その死後二〇年以上も経過した延喜初年に生きていたはずはない。この箇所が単なる記述の誤りでないことは、同書の他の部分に、

むかし、宇多のみかどの御ころ、都良香と云いみじき博士侍り
けり。〔巻八〕

とあることによってもわかる。良香の生没年が引き下げられる要因がどこかに存在していたに相違なく、それは又「十訓抄」にみられるような説話への道真の介入を導いたものでもあるだろう。

この点に関しては、『撰集抄』の説話には年時の記載に誤謬を犯したものが少なからずあり、特に登場人物の活躍時期を誤ったものが多いので、殊更に取りあげるに価しないとの反論もあるかもしれない。しかし同様のことは、後述する「永濟注」においても見られ、『撰集抄』の編者の記憶違いとは言えない。それ故、十三世紀半ば迄には説話の内容を大きく変化させる因となるようなことが起こったと考えてよいだろう。そこで思い至るのが「北野天神縁起」の成立である。

四、「北野縁起」の成立と良香との関わり

「北野天神縁起」（以下混乱を避ける為、一般名称として用いる場合には「天神縁起」と略記する）には多数の諸本があり、初期に成立したものととしては、「建久本」「建保本」「承久本」がある。「建久本」とは五条菅家蔵『天神記』を、「建保本」とは神宮文庫蔵『北野事跡』を、そして「承久本」とは北野天満宮蔵『北野天神縁起』をいう。各々の名称は本文中に記載される成立年時に基づい

ているが、「建久本」が建久年間（一一九〇—一一九八）に成立したという確証はなく、寧ろ内部の検証により建久年間には成立していなかったらしいことが明らかにされつつある。しかし承久年間（一二二九—一二三二）に成立したことがほぼ確実である「承久本」の成立に先立って、「建久本」並びに「建保本」が成立していたと考えられるから、十三世紀初頭には「北野縁起」は成立していたものと思われる。

「北野縁起」は道真の出生（化現）から、左遷の憂き目に遭って没するまでの人生を描き、その死後天神として祀られる過程を辿り、更に北野神社の靈験譚を添える。縁起中の多くの段に先行する文獻があることが、笠井昌昭氏によって指摘されている。^{〔註7〕}つまり「天神縁起」は種々雑多な記録の集積であると捉えられないこともない。村上学氏は「北野天神縁起に登場する道真は統一された性格を持っていない」と言われ、又松本隆信氏も「抛り所とした資料が生そのまま露呈していることは否めない」と言われている。^{〔註8〕}

けれども私は「北野縁起」の道真の性格が統一性に欠けるとしても、数々の記録が集成されたということを重視したい。天神に関連した記事が一つの縁起としてまとめられた時、それまでの文獻からは窺い得なかった新しい天神像が、より明確な形で現われたと言えるのではないか。「北野縁起」は天神としての道真のイメージを定着させたのである。

「天神縁起」の諸本が多いことは先に述べたが、そのことは北野信仰が極めて盛んであったことを意味する。逆に言えば、「天神縁起」の内容は人々に知られる機会が多かったということである。「天神縁起」の成立を以って、天神としての道真像が明確になると

同時に、神である道真が天才的な詩人であり優秀な学者であり有能な政治家でもあったとの認識が、当然のこととして、広く受け入れられることになったと思われる。

再び良香が道真の面前で詩を披露したという説話へ話をもどそう。道真の登場しない形の説話を収める『和漢朗詠集私注』が成立した十二世紀中葉から、道真登場型の『十訓抄』が成立した十三世紀半ばまでは、およそ百年間。その百年の間に特筆すべきことが起こったとすれば、それは「天神縁起」の成立流布であろう。「天神縁起」によって道真の絶対的優位性が確定した。道真の才は良香に優るとの考えのもとに、良香に対置する形で、良香の説話の中に道真が介入してきたものであろう。このように考えるなら、十三世紀頃から天神信仰の影響が他の人物に関わる説話にも現れてくると言えるかもしれない。

但し、都良香に関する説話は色々あるのに、どうしてこの説話に限って道真が登場してきたのか。先に直接的な要因ではないとした、同じ内宴に道真も出席して詩を賦していることから、二人が結びつけられたことは考えられる。

天慶四年（九四一）に成立した『道賢上人冥途記』に登場する道真は多くの従者を連れていくが、その様は、

侍従眷属異類雑形不可三勝計一、或如三金剛力士一、或如三雷神鬼王夜叉神等一、甚可三畏怖一、各持三弓箭箠鞘無量鎌杖一也
というものである。鬼の如き容儀の神々を統べるのが道真である。

『冥途記』は三善清行の弟と伝えられる道賢という人物が頓死して地獄巡りをし、その際道真とも対面したことを、蘇生してから記したものである。右の箇所は「天神縁起」にもあり、鬼神の統率者道

真、という理解があったであろう。鬼との繋りから、良香の説話に道真が顔を出したことも大いに考えられる。

道真登場型の説話は他に、『十訓抄』から直接に引用した『東斎隨筆』と『本朝高僧伝』巻七十四に見られる。又管見に入った『朗詠集』の注では、「永濟注」と広島大学蔵慶長十三年（一六〇八）書写本にも道真登場型の説話が記されている。

「永濟注」とは北村季吟が『和漢朗詠集註』の中で用いた漢詩に關する古注であるが、黒田彰氏によって鎌倉期の注であることが明らかにされている。そこには、

古老の説にいふ。良香上句を作つて下句を作り煩うて之れを案じつゝ、羅城門の前をすぎけるに羅城門の鬼樓上にて恐ろしげなる聲して此の下句を云ひけり。良香菅丞相に逢ひ奉りて、斯る詩なん作つて候ふと申しければ、僻事なり、下句は羅城門の鬼のつけたるとこそ云ひしかと仰せられしかば良香涙を流して三たび拜し奉つて實にはしか侍りし事也とぞ申しける。…（中略）：都良香は主計頭貞繼の男。官は文章博士也。醍醐天皇の御宇の人也。（『日本歌謡集成』による）

とある。『十訓抄』の記述よりは詳細であるが、内容的には大差がない。ここで注意されるのは傍線部である。前掲の『撰集抄』の傍線部④と全く同じ誤謬を犯しているところから、鎌倉時代には良香は宇多・醍醐朝の人と見做されていたことがわかる。何故このようなことが起きたのか。

それは良香と道真とが結びつけて考えられるようになった為ではないか。道真は宇多天皇の治政下で活躍し、醍醐天皇即位後右大臣の位に着く。延喜元年（九〇一）に至って左遷の憂き目を見るが、

醍醐天皇との関係は深い。道真を醍醐朝期の人とみることもできよう。しかも道真が活躍した時期には多くの学者・詩人が居り、道真の周辺にも、寛平二年（八九〇）に没した橘広相、延喜十二年（九一二）没の紀長谷雄、同十八年没の三善清行らいた。良香も又道真の周辺人物の一人と認識されていたのであれば、彼本来の活躍時期である貞観時代から、寛平・延喜時代へと引きつけられてゆくのは自然の成り行きである。

五、「天神縁起」の中の都良香

「天神縁起」の影響を受けて、良香の説話の中に道真が登場するのであれば、鬼の匂をめぐる説話と「天神縁起」とに表われる兩人の関係には、自ずと共通する点があるはずである。その点を明確にするため、次に「天神縁起」の本文を見たい。

「天神縁起」の中では最も成立が早いとされる「建久本」から引用する。

貞観十二年青陽の比をひ、都良香が家にて門生等は弓あそひしけるに、ゆきあひ給たりければ、亭主おもふやう、この君は戸ほそを閉しきみを出して机案にひちをくたしつ、弓のものとすゑもしり給はしと思ひて、^⑤籠の中にかくれ居て、心みにいさせ奉りければ、弓場につる立て、^⑥弓に箭をさしはけて、ひきわたし給たるすかた様、養由がかいなつきまのあたり見つる哉と、各々目もおとろく程に、ふたゝひはなては二度中ぬ、^⑦百發百中のいきほひ、此君にありけりと、^⑧都良香おとろきあさみて、射策中韻徴なりとそ相し申ける。

やかてその年の三月廿三日に、^⑨献策まし〜き、宮^⑩の言道問頭の博士にて、二問のうち^⑪に句ことに數義を合して、^⑫微事限

なかりけり。

〔「宮この言道」は都良香である〕

この段は、都良香らが勉学に追われる日々を送る道真を嘲笑してやろうと、彼に弓を射させる場面である。ところが良香らの予想に反し、道真の弓の才は素晴らしいものであったから、良香はこれこそ対策及第の徴なりと予言した。更に予言通りに道真が対策に及第した、という場面が続く。傍線を付した箇所は良香、破線部は道真に関する記述である。籠の内側から外を窺う良香^⑧と場面中央で弓を引きしぼる道真^⑥との対照的な姿はそのまま、当然のことの様に弓を的中させる道真^⑩と目を見開いて驚愕している良香^⑨の対比へと結びついてゆく。道真が立派であればある程、良香が滑稽なイメージを持つようになることは如何ともし難い。この場面により、道真の万能の才はいや増しに増し、それに伴って、良香は道真を引き立たせる役割を負う一人として位置づけられてくる。

ところがここで見落してはならないのが傍線部^⑤である。良香が道真の方略試の問題として作した文章が名文であったことが記され、良香の学者としての能力を高く評価している。右の引用箇所を一連のものとして捉える限り、良香の人物像は二つに分裂しているが、敢て一つに統合するなら、良香は秀れた博士ではあるが道真には劣る存在として認識されていたと言える。

「建久本」に続いて成立したらしい「建保本」でもこの部分は、「建久本」とほとんど同じである。ところが「承久本」では次の様になっている。

貞観十二年青陽のころ、都良香か家にて門生等か弓あそひけるに、ゆきあひ給たりける人々思様、この君はとぼそをとちし

きみをいてすして机案にみちをくたしつゝ、弓のもとすゑはし
らせ給はしとおもひて、心みに御弓いさせ給てんやと申給けれ
は、ゆはについたちて、^⑤弓にやをさしはけて、ひきまはし給け
るすかた養由か、いなづまのあたりみつるかなと、おのゝ
めもおとろくほとに、ふたゝひはなち給へはふたゝひあたり
もゝたひはなち給へはもゝたひあたる。昔もきかす今もみす。
^⑥いきをいはいはいたとへんかたおはします。都良香、人々
をとろきあさみ申ける。

やかてその年の三月廿三日に献策しましゝき、みやこのう
ちの人々ためてたきためしにそ申あひはんへりける。

先の「建久本」と対応させると、^②と^③に対応する箇所がない。
良香の秀れた博士ふりを示す^④の部分削除されていることには注
意される。良香が如何に優秀な博士であったかということが記述さ
れないことにより、「天神縁起」に占める良香の大きさは、一まわ
り小さくなったと言える。彼はただ道真を引き立てる役割しか果し
ていない。

道真が貞観十二年（八七〇）に方略試を受験した折の間頭博士
は、確かに都良香であった。その判詞は『都氏文集』巻五に収載さ
れている。しかしその内容は当時の一般的な例に洩れず手厳しいも
ので、道真は「中の上」という成績で合格とされている。良香と道
真とが親密であったとの証左はなく、又良香が道真の合格に肩入れ
していた気配もない。「天神縁起」に登場する良香が、道真の合格
を予想し、更に合格を喜ぶ態度を示していることは、事実に基づく
ものではなく、道真を良香の上に捉えようとする編者の意図による
ものと考えられる。

道真が弓を射る段には出典が見出せず、編者が新たに創作したと
思われることが、笠井昌昭氏によって指摘されている。^(注)そうである
ならば「天神縁起」中の道真の良香との関係は、殊更に作られたも
のとみることが出来る。そして「建久本」「建保本」にあった良香
に関する記載（傍線部^④）が「承久本」において削除された時、良
香に対する道真の優位性は更に際立ってくる。

以上のように考えると、鬼の付句をめぐる道真登場型説話に表わ
れた、道真優位の、道真と良香との関係は、「天神縁起」にみられ
る兩人の関係を反映したものであると言えよう。「十訓抄」を例に
とれば、良香の「申す」に対し、道真には「仰らる」という敬語が
用いられており、説話の中で扱われ方に差がある。これは道真が
神であるという前提があつて始めて理解される。

六、「天神縁起」に補入された良香の説話 — 良香の矮小化 —

良香の説話の中に道真が登場してきた時から、『江談抄』や『神
仙伝』に伝えられる説話ほどではないが、『私注』や『撰集抄』の
説話が保っていた良香の詩に対する称讃、という意味合いが無くな
り、良香の相対的評価は著しく低下した。このことを道真側から見
ると、良香という有名な詩人であり学者でもある人物を、言わば
「狂言回し」として利用することで、道真の絶対的優位を定着させ
たということになる。

けれども相対的地位が低下したとはいえ、『十訓抄』や「永濟
注」においても、主人公は依然として良香である。それが道真を主
人公とする説話に交えられた前、この一連の説話の中の良香の人物
像も又、質的転換を遂げることとなった。

「天神縁起」の諸本は梅津次郎氏によって、冒頭文の相違という観

点から甲・乙・丙の三種に分類されているが、それとは別に、独自の内容を持ち真名書本であるという特色を有する安楽寺本系統の本がある。

「天神縁起」の中で鬼の付句をめぐる説話を含むのは、「日本我朝は神明の御めぐみことにさかりなり」という一文から始まる乙類の中の、第二種本として分類されるものと、安楽寺本系のものでである。乙類第二種本には「光信本」「光起本」「飛鳥井本」等があるが、ここでは『群書類従』所収の「飛鳥井本」から引用する。先づ安楽寺本系統の中の一本である内閣文庫蔵『北野天神御縁起』（以下「安楽寺本」と呼ぶ）と「飛鳥井本」の該当箇所を抜き出して比べてみる。

飛鳥井本

其年の春、都良香羅生門を通りけるに。春風暖に麴塵糸を亂せる柳の家々の垣根ことにみえければ。氣霽風梳ニ新柳髮一と詠じたりけれども、次の句をば案し煩たりけるに。羅生門の上より大にしはがれたる聲にて。氷消浪洗ニ舊苔鬚一とぞ付たりける。良香身の毛も立ておそろしかりけれども。さすがに嬉しくて。急ぎ管家に參て。良香こそ羅生門にて詩作りたれと申て。我

(注1)

安楽寺本

其年春、都良香通、羅城門一在、麴塵亂、絲、柳家々垣根毎見、春風禍、稍在、氣霽風梳、新柳髮、云在、次句案類在、羅城門上、大、俾以、聲、氷消浪洗ニ舊苔鬚ニ付在、良香身毛、豎、冠、流石又、喜、急管丞相參、良香羅城門、似、詩詞達候、吾物顔氷解句、為、被、申連ニ管丞相打咲給、哀、人物

物がほに氷消の句をも申つゞけたりければ。菅丞相うち笑せ給ひて。あはれ人の物はほしげにおはするかな。上の句こそ良香の詞とも覺ゆれ。下の句にをいては。鬼神の次たる者哉。との賢才の士にはおほせず。矯傍ある人にておほしけるこそあさましけれと仰られければ。良香餘に心うくはづかしくて。顔より火の燃出たるやうにこそおぼえられ。それよりしてぞ。菅丞相は神に通じ給へりとは。人しりたりけり。

この二つは仮名書と真名書という相異があるにも関わらず、極めて類似した文章となっており、典雅が同じか或いは互いに書承関係にあるかのいづれかであると考えられる。この点に関しては村上孝氏が、安楽寺本は「この説話を乙類第二種本（引用者注）飛鳥井本等）から補ったものと思われる」と述べておられる。この部分は「建久本」や「承久本」等にはない。それが二つの系統のものだけに含まれているのは、「後の諸本に至って『十訓抄』に見られるような説話によって増補した」と松本隆信氏が指摘される通りであろう。つまり「飛鳥井本」等が書写した本は良香の鬼の付句をめぐる説話を他の説話集から縁起本文に増補し、更にその本から安楽寺本

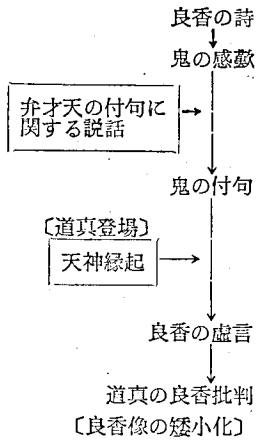
ホシゲニ、ヲハスルトノカナ、ハ、抗、御殿乎、上句良香詞覺、於、下句、若鬼神付者哉、殿賢人、不、御座、有、偏頗、人、座、在、無、正、タリケレラレセ、被、仰、者、良、香、餘、心、憂、爲、恥、自、貌、火、出、様、被、思、自、其、菅丞相者、神、通、人、被、レ、知、食、在、(注15)

系の本に補入されたという流れを辿る。

「天神縁起」内部に吸収されることで説話の内容はどう変化したか。前掲の実線部④⑤では良香の得意な様子が滑稽に描かれている。又破線部⑥では、良香は道真によって罵倒され侮蔑されている。ここでは良香の人格に対する批判がなされており、説話内部における良香の位置の低下だけに留まらず、彼の人物像が矮小化されていると言える。

結び

以上のように、ある説話の流れの中で都良香という人物がどのよう捉えられるかということを追うてみた。『江談抄』や『本朝神仙伝』が称讃した名替の詩人のイメージは、順次下落してゆき、ついに人物像の変質をみることとなった。が、良香に関する他の説話に描かれる彼は相変わらず名替詩人であるから、良香の人物像道真に対する時だけ変質させられたと結論づけられる。それは天神説話の影響力がいかに甚大であったかという一証となろう。最後に、本稿で辿った説話の流れを大まかに図示して論の締め括りとしたい。



(注1) 『三訂平安朝日本漢文学史の研究』(明治書院・昭和50年)

(注2) 『日本古典文学大系・和漢朗詠集』解説の川口久雄氏の調査による。

(注3) 『日本古典文学大系』の訳による。

(注4) 『和漢朗詠集私注』(新典社・昭和57年)

(注5) 鬼の感歎の説話も弁財天の付句の説話も『江談抄』の諸本のうち、類聚本系のみあり古本系には含まれない。

面説話が結びついて鬼が下句を付けたという説話が出来たということについては、下西善三郎氏の指摘がある。(『文学説話と撰集抄巻八』金沢大学国語国文第6号)

(注6) 『説話文学辞典』長野晋一編(東京堂出版・昭和44年)、『日本の説話別巻・説話文学必携』(東京美術・昭和51年)等。

(注7) 「北野天神縁起の基礎的研究(一)」(人文学第62号)

(注8) 「神道集巻第九『北野天神事』ノート(一)」(名古屋大学国語国文学17号)

(注9) 「中世における本地物の研究(一)―本地物の成立と北野天神縁起―」(『斯道文庫論集第14輯』)

(注10) 「八朗詠古注V管見―永済注について―」(『国語と国文学第60巻第11号』)

(注11) ここでは絵巻の構図については考慮していない。文章から捉えられる道真と良香についてのみ考察する。

(注12) 『天神縁起の歴史』(雄山閣・昭和48年)

(注13) 「天神縁起絵巻―津田本と光信本―」(美術研究126号)

「正嘉本天神縁起絵巻に就いて―その出現並びに弘安本との関係―」（国華179号）

〔注14〕「神道集巻第九『北野天神事』ノート（一）」（名古屋大学国語国文学15号）

〔注15〕『群書類従』巻第十八『北野縁起』。奥書に「右北野宮縁起得飛鳥井一位雅章卿所筆本書以一本及梅城録比較了」とあるところから「飛鳥井本」と呼ばれる。室町時代のものである。

〔注16〕この部分を引用した『神道大系神祖編北野』（神道大系編纂会・昭和53年）には合符が付されているが、ここでは省略した。

〔注17〕注14に同じ。

〔注18〕注9に同じ。

〔付記〕本稿は修士論文の一部をもとに、昭和五十九年度広島大学国語国文学会春季研究集会に於いて口頭発表したものである。論をなすにあたっては、終始稲賀敬二先生より御助言を賜わった。ここに記して厚く御礼申し上げます。

— 広島大学大学院博士課程後期在学 —